【報　告】

フィリピン・スタディツアー報告

上村ゼミナール
（文責：湊　智哉）

目　次

1. はじめに
2. 現地研修と路上の子供たちとの交流
3. ごみ処分場周辺地域でのフィールドワーク
4. 養護施設「子供の家」でのボランティア活動
5. おわりに
巻末資料

1. はじめに

2018年9月4日（火）から9日（日）までの期間，上村ゼミナールでは有志学生によるアクティブラーニングの一環として，フィリピンでスタディツアーを実施した。これは，名古屋に本部を置く認定NPO法人アイキャンとの社会連携に基づきながら，政治行政学科に在籍する2年ゼミ生19人が4泊5日間の日程でフィリピンに滞在し，平和ならざる状態にある現地でフィールドワークを行うと同時に，路上の子どもたちの自立支援のためのボランティア活動をおこなうことを目的に企画されたものである。

今回の私たちの大きな目的は，フィリピン最大のごみ処分場に隣接するパヤタスとマニラ市内ブルメントリットにある路上の子どもたちのための一時保護施設を訪問してフィールドワークすることと，フィリピンの首都マニラに隣接するサンマテオ（San Mateo）市にある養護施設「子どもの家」を訪問し，そこで自分たちが立案した幾つかのプロジェクトを自分たちみずからが実践をする

ことにあった。その主な内容としては，養護施設に入所している子どもたちの支援の一環として，同施設内に家庭菜園を造園すること，日本食を一緒に調理して家族的な雰囲気と食育を通じた国際交流を実践すること，スポーツを通じて子どもたちと交流し親睦を深めることなどの企画で構成されている。

学生みずからが草の根レベルの国際協力や国際交流を実体験することに主眼を置いた今回のスタディツアーで，参加者は寝食をともにしながら現地で活動を実践してきた。教室だけでは決して経験できない貴重な学びを体験することができた。準備も含めて多くの困難と苦労があったが，その分だけ大きな感動と気付きがあった。こうしたプロジェクトの実践を報告としてまとめることで，多くの人に政治行政学科学生有志による海外でのフィールドワークとボランティア活動実践の一端を知ってもらいたいとの願いから，ここに報告をまとめることにした。

2. 現地研修と路上の子どもたちとの交流

マニラ空港に着き ICAN スタッフと合流した。その後日本円をフィリピンペソに換えるために観光客が訪れるエリアに行った。換金後にフィリピンのデザートであるハロハロを食べながら，近代的なビル群が林立したフィリピンの街並みを車で走り抜けホテルに向かった。ホテルで夕食の前に現地の ICAN スタッフによるタガログ語講座を受け，タガログ語の挨拶や美味しい時の表現，フィリピン人が言ってもらえると嬉しい言葉や自己紹介に使う言葉，現地でのフィールドワークに参加するにあたっての注意点等々について事前研修を受けた。

2 日目と 3 日目は 2 グループに分かれて行動したが，ここでは 2 日目に 2 グループのブルメントリットでの活動，3 日目にパヤタスでの活動を紹介したい。

最初のフィールドワークは，「路上の子どもたちとの交流」をメインとした活動であった。朝食を各自で食べた後，朝 9 時に宿泊先を出発し，車でブルメントリットへ向かった。ブルメントリットへ近づくにつれて，明らかにどんどん街並みが変わっていく様子が感じられた。目的地に到着してから，現地の

ICAN のスタッフと合流し，周辺の路上の子どもたちの一時保護を目的とした施設であるドロップインセンターへ案内してもらった。その道のりの途中には，何の安全対策も施されていない線路があり，私たちが歩いているちょうどその時にすぐ脇を電車が通過した。恐怖心で足が震えるほど危険な場所であることは誰の目にも明らかであったが，そこは路上の子供たちが日常的な生活の場として使っている空間でもあった。そのあと市場に向かった。街並みは，日本でいうアメ横のような雰囲気で，たくさんの人々で賑わっていた。わたしたち日本人学生の集団はどうしても目につきやすい存在でもあったこともあり，道行くたち現地の人たちの好奇の視線にさらされながら，ただひたすら前の人から離れないようについていくという感じであった。しかし小休止のとき大通りの道端にふと視線を向けると，お店の前やジープニーが止まっているところには，子どもたちもたくさん花売りなどの路上の仕事をしていた姿が目に焼き付いた。また，途中で市場の中も通ったのだが，保冷施設もないなかで食べの物が袋に包まれていない状態でそのまま売られていた。ハエがたかっている売り物もあったが，日本で当たり前と思っていることが当たり前ではない現実を学ぶ絶好の機会となった。そのような道のりを 15 分程歩き，ようやくドロップインセンターに到着した。ドロップインセンターの扉を開けた途端，今までのブルメントリットの陰鬱な街の雰囲気からは考えられないようなキラキラした笑顔が最初に飛び込んできた。そこには，とても元気な子どもたちがたくさんいて，私たちが入るやいなや，すぐに駆け寄ってきて，抱きついてきてくれた。荷物を置いたあとすぐに，ドロップインセンターで子どもたちの面倒を見てくれているスタッフが一緒になって，私たちと歌を歌いながら，手を叩いたり踊ったりしてお出迎えをしてくれた。

アイキャンの現地スタッフから，ドロップインセンターで子どもたちに提供している教育や，保健•衛生，給食活動，カウンセリングなど，詳しくレクチャーを受けた。そのあとにスタッフの配慮で，いくつかのグループに分かれて，ドロップインセンターに来ている子どもたちにインタビューをする機会をもらった。わたしたちのグループでは，子どもたちを代表して 14 歳の少女が輪の中

に入ってくれ，わたしたちの質問に答えてくれた。その少女は通信教育学校にも通っており，将来は先生になりたいと言っていた。恥ずかしがりながらも，私たちの質問に丁寧に答えてくれたのが印象的であった。また 別グループでは，13 歳の男の子がインタビューを受けてくれた。彼は将来警察になってドラッグを使う人をなくすことが夢である言っていた。その後，円になり，一人一人自己紹介をしたあとにこちらから提案した遊びのフラフープくぐりを楽しんだ。2 つのチームに分かれて対戦した後，次は押し相撲で遊んだ。日本人とフィリピンの子供で対戦を行った。みんな，笑顔で積極的に遊びに参加する子がたくさんいる中で，恥ずかしいのかなかなか自分から混ざることが出来ない子もいた。でも，ドロップインセンターの子どもたちは，仲間はずれなどせずに，みんなで助け合っているように見えた。最後に自由に写真撮影をして，それを終えると時間になり惜しみながらも子供たちと別れの挨拶をして，ドロップインセンターを後にした。全員でブルメントリットの街中を歩き，車で昼食を食べにジョリビーへ行った。ジョリビーとは，フィリピンのファーストフード店であり，日本のマクドナルドなどと雰囲気が似ていた。ジョリビーでは，ICAN の方が先に私たちの分までお肉とご飯と，飲み物とアイスを注文してくれていて，すぐにいただくことができた。お肉もアイスもとても美味しかった。昼食を食べた後，また車で今度はカリエカフェという，元路上で生活していた方々が，運営するカフェに行った。そこには，日本でいう高校生くらいの年代の方々がいて，カフェについて説明してくれた。カリエカフェは子どもたちが路上へ戻らないようにということを一番の目的として，カフェ以外の活動として，自分たちの成功体験を今の路上の子どもたちと共有したりもしていた。また，カリエカフェは，フィリピンの中でも 1 番大きい大学の中で営業していた。それは，その大学に通っている人々が将来大人になって政治家など，フィリピンの社会をリードする立場になった時に，路上の子どもたちにも少しでも目を向けてくれるようにと意図したものであった。質疑応答をしたあと，アイキャンのスタッフが考案した研修教材のうち，カフェを運営する上でのトレーニングも兼ねたゲームを行なった。4.5 人ほどのグループにわかれ，協力して地図

を完成させるという内容だった。そのゲームでは相手の気持ちを考えることの大切さを学んだ。そして別グループでは3チームに分かれてトランスミッションゲームを行った。トランスミッションゲームとは絵の内容を身振りなどしないで言葉だけで情報をまとめていかに早く伝えられるかを競うゲームである。このゲームは相手の気持ちを考えること，集中することが求められ，接客の際のコミュニケーションの能力の向上を目的としていた。最後にみんなで集合写真をとったあと，次はそのカリエカフェで働いていたメンバーが住む家へ家庭訪問を行なった。細い裏路地のような道を通った。その道中はたくさんの家が並んでいた。洗濯物が干してあるなど生活感が溢れていた。5分ほど歩くとその方の家に到着した。その家がある所は，石で作られた家がほとんどで，正直，こんなところに住んでいるのかと思うほどであった。しかしその家々のすぐ目の前には，とても大きな石の壁が立っており，外からは全くその貧しい様子は見られないようになっていた。また別の家庭訪問では7人で住むには小さい家を訪問した。コンクリートでできており，中には扇風機，テレビがあった。そこでカリエカフェで働いていた方とその祖母にあたる方に話を聞いた。内容は生活や，過去の話であった。また別の家庭訪問では大家族を訪ねた。父親が建築会社に勤めていて1日600ペソ稼いでいた。今回家庭訪問を受け入れてくれたカリエカフェの女性店員は，高校は卒業していないが，ALLSという教育施設で勉強していた。将来はALLSの教師を志望しており，大学進学を希望している。また別の家族も大家族であった。父親がタバコを売っていて300から600ペソ稼いでいた。母親はサンパギータというフィリピンの国花を作り，夜に路上で売っていた。生活費は，働ける子どもは働いてやりくりしていた。将来親は子どもに安定した職に就くよう願っている。子どもは日本のアニメとかを見たりして，日本に親近感があった。

そして，家庭訪問が終了し，車でアイキャンの事務所に向かった。アイキャンの事務所は路上で生活している人などが入れない地域にあり，綺麗な庭などが見られた。到着するとすぐに事務所内に案内された。そこで1日の振り返りを行うシェアリングが始まった。シェアリングで考える内容は1日を通して感

じたことと，自分にできることは何かであった。各々自分の考えを発表していった。感じたことに関しては私たちとの生活水準の差や，家族を大切にする心などが話題に上がった。

3. ごみ処分場周辺地域でのフィールドワーク

三日目に，私達はパヤタスごみ処分場へと向かった。そこでICANのスタッフからパヤタスのごみ処分場について説明を受けた。パヤタスごみ処分場では，野積み方式のごみ処分場で，毎日約3000人が廃品回収をして100から150ペソの収入を得ている。すぐ近くには住宅地が広がっており，住民の健康被害が深刻な問題となっている。ごみ山から出る有害な化学物質は，呼吸器系の病気を引き起こすこともあり，不衛生な環境により皮膚病や寄生虫による病気が多く発生している。以前は美しい谷であった。廃棄物が捨てられるようになったのは1973年頃で，当時は住人も少なかった。1980年代後半，政府によってケソン市各地で立ち退きにあっていた人々の再定住地として指定され，人口が増加していった。

ごみ山が大きくなったのは，1993年にフィデル・ラモス大統領がトンドにあるごみ処分場(スモーキーマウンテン)の閉鎖を命じたからである。このため，マニラ首都圏の毎日6000トンのごみの大部分が，パヤタスに運ばれるようになり，パヤタスのごみ処分場がフィリピン最大のごみ処分場となってしまった。当時，フィリピンではダイオキシンに関する国際条約に加盟しているため，焼却施設を作ることが出来なかった。そして，管理が不十分なまま，大きくなりすぎたごみ山は，2000年7月10日に大崩落した。高さ約30メートル，幅約100メートルにわたって崩落したため，約500世帯以上の家族が犠牲となった。また，一週間前から台風の影響もあり，多くの子どもたちが自宅待機をしていたため，彼らの多くが犠牲となった。犠牲者は誰一人として救うことが出来なかった。

その後，フィリピンの環境省が，衛生上と環境のためごみ処分場を閉鎖させ

た。しかし,多くの人々がごみ山で生活費を稼いでいたため,それを失った人々は別のごみ山へ稼ぎに出て，新しい職を求めて町を出ていく人もいた。どれも安定した稼ぎが得られないため，ごみ山が閉鎖後，パヤタス周辺では犯罪率が上がってしまった。また，ごみ山が崩落後世界中から批判を浴びたフィリピン政府は，ごみ山にフナの木を植えてメタンガスが発生するのを防ぐようにしたり，バイオガス発電所を建設し，その周辺の電力を無料で提供したりした。

このようなパヤタスゴミ処分場の歴史について説明を受けた後，パヤタスに住む人の家庭を訪問した。そこでは3畳あるかないかほどの部屋に3人で住んでいる19歳の女性が話をしてくれた。その女性は3歳の子供と旦那さんと暮らしている。1日の食費が100ペソ（日本円で約200円）と言っていて，1番幸せなことは家族と一緒にいる時間であると言っていた。そして夢は経済的な理由で中退してしまった高校を卒業することだと言っていた。また別の家庭訪問では4人家族で5歳と1歳の子どもがいる家庭を訪ねた。家は一軒家のような大きさで3家族でシェアハウスをしている。家賃は1000ペソであり，3家族で分割して払っていた。父親がごみ拾いで1日100から150ペソほど稼いでいた。しかし，毎日の生活費だけで100から150ペソはしている。現在は，ごみの分別の仕事をしているが安定はしていない。また別の家庭訪問では，4人家族で17歳と12歳の子どもがいる家庭を訪ねた。父親がプリントを作る仕事に就いていて1日420ペソ稼いでいた。母親はフェアトレード商品を作っていたが,現在は深刻な病気を患っている。治療費を親戚や友達から貰って助け合って生きている。

家庭訪問後は昼食の時間になった。昼食はICANのスタッフとパヤタスのお母さんたちが作ってくれた。シニガンスープというフィリピン料理であったが，私達日本人の口に合いやすいように工夫してくれた。デザートには，フィリピン名産のバナナを出してくれた。昼食後，眠い私達に対してゲームをしてくれた。日本にも伝わっている子どもの歌だったが，頭や体を使ったゲームだったので眠気は覚めた。心遣いに感動した。

次はICANの活動についてレクチャーを受けた。それによると，ごみ処分

場閉鎖以降，住民のなかでごみ処分場以外での収入機会のニーズが高まり，ICANの技術訓練が始まった。この技術訓練に参加した住人たちが，その後フェアトレード商品生産団体を設立した。また，子どもたちの健康被害に対し，問題意識を持つ母親たちは保険の知識や技術を得ることに関心をもち，子どもの栄養改善を行うために集まるようになり，そのグループが定期診断を継続していくために協同組合を設立していったということであった。

パヤタスでは，収入源の低さと衛生面，教育が課題となっている。フィリピンでは，マニラ首都圏を除くと，貧困地帯が広がっている。そのため，マニラに行けば何かしらの現金収入が得られるため，地方からマニラへやってくる人が多いと聞いた。しかし，マニラでは住める家はないため，パヤタスのようなマニラ周辺の町にスラムを築いて生活をしているとのことだった。衛生面では，ごみ山に廃棄してある医療廃棄物や金属器による怪我，ごみから発生するメタンガスなどの有害物質，寄生虫などによって呼吸器系の病気や皮膚病に悩まされていることが分かった。教育では，大学を卒業しないと安定した職に就くことが出来ない状態になってしまうとのことである。

そこで，ICANの活動は地元たちの知識や技術を強化する形で進められている。収入源の向上のためには，学費や交通費などの通学経費の補助，青年の技術訓練や小さな商売を始める組合員への融資の起業補助，訓練を経た青年の就職活動の経済的・精神的補助を行っている。衛生面では，医師による週二回の定期診断や結核を治療する服薬モニタリング・小児結核の治療費補助，母親と子どもたちの保健教育，低体重の子どもたちへの給食提供による栄養改善化，保険知識技術向上の訓練によるコミュニティヘルスボランティア育成，安価な薬を提供する薬局の運営，若者たちの保健研修によるユースヘルスアドボケイツ育成を行っている。教育では，週一回子どもたちの遊びの場の提供や就学前の子どもたちの基礎的教育の提供を行っている。また，協同組合を結成するための政府機関への団体登録を補助や協同組合強化のための訓練も行っている。現在は，ICANからパヤタスの住民で構成された協同組合（PICO）へと活動が引き継がれている。また技術訓練に参加した住人たちが，その後フェアトレー

ド商品生産団体（SPNP）として成長した。PICO は現在のメンバーは 13 人で栄養に関して経済的に優しいメニューの作り方の提供やデング熱にならないためにこまめな掃除をするように呼びかけるなどの活動を行なっている。SPNP は現在のメンバーは 12 名でテディベアや縫い物を販売している。ICAN から独立してメンバーの補充やテディベアのアレンジなどもできるようになっている。SPNP で働く人たちはそこで成功を収めて息子や娘を大学に進学させられることが出来ている人もいて幸運だったと言っていた。

ここで説明は終わり，パヤタスのお母さんたちが作ってくれたフェアトレード商品を購入した。その後，診察室の見物をした。あいにく，普段来ている医者ではなかったが，パヤタスの住民がどのような病気に悩まされているのか話してくれた。

私達は，パヤタスの ICAN の施設を出ると，ICAN の事務所へと向かった。そこでパヤタスのゴミ山の崩落後の映像を見せてもらい，シェアリングを行った。そして，夕食は ICAN の事務所でご馳走になった。そこではエビとココナッツをベースに煮込んだ鶏肉やマッシュルームのスープなどフィリピンの料理をたくさん堪能することが出来た。またフィリピンのフルーツもいただいた。具体的に，マンゴー，ドラゴンフルーツ，マンゴスチン，ポメロなどがあった。そして，ICAN から T シャツをもらってホテルへの帰り道でコンビニに寄り，水などを購入した。ホテルに着いてから 4 日目に披露する踊りの練習をして各自自由行動を取り，就寝した。

4. 養護施設「子どもの家」でのボランティア活動

宿泊先を出発した後，SM サンマテオへ向かった。子どもたちの家で料理を担当するチームは，ショッピングモール内のスーパーで材料の買い出しを行い，その他の人たちは自由にショッピングモール内を散策した。

自由時間が終わり，全員で集合した後，マン・イナサルというお店で昼食をとった。ここでは，フィリピンの文化でもある手食を体験するということで，

出てきたチキンとごはんは手で食べた。その後子どもたちの家へと向かった。

ショッピングモールから子どもたちの家まではすぐに到着し，子どもたちが歓迎の挨拶を日本語でしてくれた。私たちがタガログ語で挨拶をした後，円になって1人ずつ自己紹介をした。その後，菜園づくり（以下菜園チーム）と前述した料理づくり（以下料理チーム）に分かれて各作業を開始した。

料理チームは，夕飯にふるまう日本食の準備を行った。作った日本食のメニューは，「生姜焼き・お味噌汁・白玉あずき」の3品である。日本から持参した材料は，生姜焼きのタレ・だし入り味噌・乾燥わかめなどが入った味噌汁の具・袋入りのあんこ・白玉粉。スーパーで調達したものは，肉・氷の塊。水は水道水を沸騰させて調理した。

菜園作りは，寮父であるカタイが説明してくれたため，スムーズに行うことができた。男子は，土を耕したり，菜園に動物が入らないような柵を作るための竹を切ったりするなどの作業をした。女子は，男子が耕してくれた畝に，苗を植えたり種を埋めたりした。そして畑が出来上がったあと，全員で柵を作った。

途中，どちらのチームも一度作業を中断し，寮母さんたちが準備してくれたフィリピンのおやつ，ビコ（もち米をココナッツミルク，ブラウンシュガーで甘く煮詰めたもの）をみんなで食べた。食べ終わった後，料理チームは夕食でお皿として使用するバナナの葉を刈りに行き，収穫した葉は綺麗に拭いてテーブルの上に並べた。キッチンに戻った後は，寮母さんたちが作っているご飯の手伝いをしつつ，日本食を作った。

その後，菜園チームも作業を再開させた。外は晴れていて暑く，寮母さんが，「適当に休憩をとって，水分補給しながらやってね」と声をかけてくれた。最後に柵を針金でくくりつけるのだが，途中で針金がなくなってしまった。近くの店は既に閉店してしまったため，針金に関する作業は翌日となった。暗くなる前に竹の長さを採寸し，針金で括り付ける以外はやり終えた。作業が終了した菜園チームの男子と子供たちは，夕飯を作っている最中に，外にある風呂場で入浴した。

夕飯が完成すると，料理チームが収穫したバナナの葉をお皿にし，手食形式

で頂いた。食後はみんなでテーブルの片づけや洗い物をし，企画していたダンスを披露した。そして翌日が誕生日という子へバースデーソングを歌い，サプライズを成功させた。その後，各自，子どもたちの就寝時間まで自由に過ごした。菜園チームの男子は子どもたちと遊んだり，勉強を教えたりと交流を深めた。子どもたちが就寝した後は，半分ずつの人数に分かれてシェアリングを行い，それぞれがこのスタディツアーで感じたこと，考えたことを発表し合った。

最終日は，朝食の後，4日目と同様にグループに分かれて作業を再開させた。菜園チームは，さらに人数を半分に分割し，半分は昨日の残りの作業，もう半分は就寝時に使用したシーツや枕カバーを手洗いした。一方，料理チームも菜園チームと同様に分割し，朝食の片付けを行う人とパッケージを完了させる人で分かれた。時間をみて洗濯チームと料理チーム，菜園チームの作業内容を交代し，全員が各作業を完了させた。その後，出発の時間ギリギリまで子どもたちと遊んだ。じゃんけん列車やフラフープくぐり，子どもたちが用意してくれたスプーンリレーは大盛り上がりだった。私たちが作った手作りのメダルを子どもたちにプレゼントし，ゲームは終了となった。お世話になった子どもたちと寮母さんに別れを惜しみながら最後の挨拶をし，4泊5日のスタディーツアーが終了した。

5. おわりに

今回のスタディツアーを通して私は『家族』の認識が大きく変わり，貧困の現状を目の当たりにしたことで今後私たちが何をしなければならないのかについて考えるようになった。2回の家庭訪問やカリエカフェ，ドロップインセンターなどでの聴き取りで「仕事をするのは生活費を稼ぐため」と聞いていて，私のアルバイトでお金を稼ぐのとは全く別物であると再認識した。そしてどこの事業地でも大事なものについて尋ねたら家族や子供と返ってきて驚いた。それは私が今までは大切なものを聞かれても一度も家族と答えたことがなかった。私の中で大切なものは生活に欠かせないものなどなくて困る物質的なもの

だと思っていた。今回のスタディツアーで家族が支柱になっていることに改めて気付かされた。そして今は不自由のない生活を送れていて，家族はいて当たり前という感覚がなくなったと思う。今後は家族に対する関わり方を改め，家族に対して純粋に虚実なく接していきたい。そして身内だけではなくジョネルさんが仕事仲間を家族のような存在と思っているように，私も仕事仲間や部活仲間，今も仲良くしている中高の友達なども家族のような存在と思い，いつでも助け合いができる関係を持ち，大事にしていきたいと思った。また事業地で勉強がしたくてもできない状態にある話を何度も聞いて，日本のように勉強できる環境が整っていることはとても幸せなことであるとよく理解できた。日本で不自由のない生活ができる幸せに感謝しながら，何事にも真摯に取り組んでいくことをこれからの課題にしようと考えている。

最もスタディツアーで見て聞いて学んだ路上で過ごしている子供たちやブルメントリットの線路付近で生活している人たちがいる実態，パヤタスで起きたゴミ山崩落の事故やその後の SPNP や PICO の取り組みなどフィリピンの貧困地域の状況や人たちの想い，フィリピン社会の良いところを多くの人に伝えていかなければならないと感じた。私たちがスタディツアーでの経験を多くの人に伝えることによって，フィリピンだけではなく他の貧困の地域にも少しでも興味を持ってくれれば，少しずつ現在の状況から打破できるのではないかと思う。そしてフィリピンのことだけではなく，今の日本での不自由のない生活が今後もずっと続けられる保障はないし少子高齢化が進んでいる現状も見られることなどを考えあわせると，他国に目を向けることも大事だが，そのぶん自国を疎かにしてはならないと感じた。

これからスタディツアーでの活動を一生忘れることなく，これからもフィリピン社会に横たわる貧困問題の解決のためささやかながら支援を継続していきたいと思う。

< 巻末資料 >

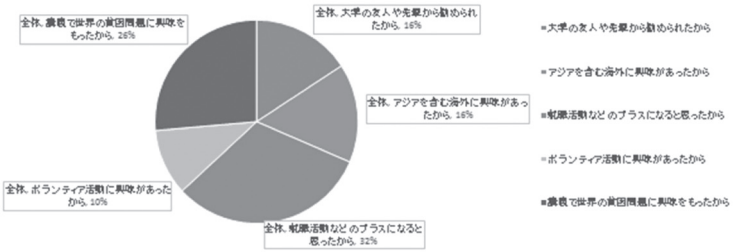
スタディツアー参加アンケート集計結果

調査対象：上村ゼミ所属 2 学年スタディツアー参加者

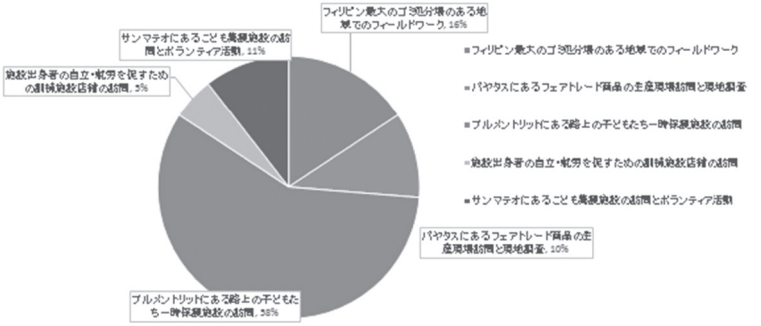
調査方法：Web アンケート（manaba）

調査期間：2018 年 9 月 10 日～ 28 日

（問1）今回のスタディツアーに参加したいと思った理由はなんですか？



（問2）今回のスタディツアーで一番印象に残った訪問先ならびに活動を挙げて下さい。



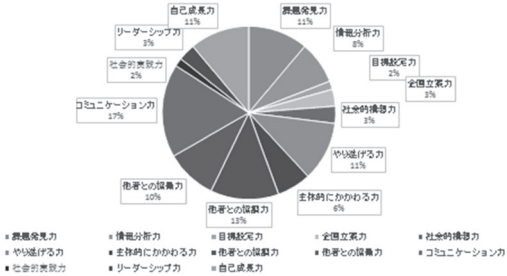
（問3）「問2」に対する回答を選んだ理由を記してください

- 日本ではありえない光景で実際に目でみて実感してなんとも言えない気持ちになったからです。

- 経済的に豊かなことだけが幸せではないということ。心が豊かであることこそが人間の本質的な幸せだと感じることができたから。

- 自分たちの住んでる環境とはかけ離れた世界に触れることができそこではぐくまれているコミュニティや家族愛などを深く知ることができたため。

（問4）今回のスタディツアーでの学びを通じて効果があったと思う項目は次のうちどれですか？



（問5）今回のスタディツアーでの学びを今後どのようにいかしていきたいと考えますか？

- 世界にはこのような環境で過ごしている人がいるということを頭の片隅にいれて日々生活し、自分の生活を見直していきたい。

- 普段の生活の一つ一つのことを本当に全力で頑張らなければ、その子たちに申し訳ないと思った。これからは今まで以上に全てのことに全力で挑む。

- 日々の生活の中で感謝を忘れない人間になりたいです。

【追記】今回のスタディツアー報告作成にあたって，惜しみなく協力してくれたゼミ生の名前を記して感謝します。伊藤　日那，鹿野　遥平，東浦　由樹，北　香澄，柏木　駿佑，家里　葵，嶽下　莉奈，松浦　匠，小名木　七海，日暮　隼也，吉原　主馬，大石　須晴，高橋　和真，藤原　遥乃，持田　旺栄，鈴木　咲良，斎藤　香純，渡邉　瑞樹，藤原　華恵（以上，2 年生）